

医療・看護現場の隙間にある課題ニーズに
しっかり応えるユニークな医療機器をお届け
しています。
課題(ニーズ)を構想(カタチ)に変えてより安全
で快適、そしてQOL向上に取り組んでいます。

全国的に広がりを見せる医工連携事業をフル活用し医療現場の
ニーズを発掘し、解決策をスピーディーに提案

会社概要

所在地 東京都文京区本郷2-17-13-102
資本金 100万円 設立 2014年
代表取締役 千種 潤也
事業内容 国内・海外向け医療用機器・器具の販売および開発・マーケティング
主要製品 ブランジャーアシストリング、薬液容器ホルダー、
ショルダーハーネス、点滴キャップ、尿バッグフック、抑制ミトン、ケモHDバッグエコ、インスリン収納ケース、ユーティリティ・ウォーカー
医療機器業 許可有(高度管理医療機器販売業・貸与業)
電話番号 03-3812-5394
WEBサイト <https://racoon-medical.co.jp/>
メール info@racoon-medical.co.jp

独自技術

- ・洗浄・滅菌等のクリーンシステムや薬剤機器、病院調乳機器を手掛ける三田理化工業(株)の事業開発部を引き継ぐ戦略関連会社を設立。
- ・三田理化工業(株)の海外展開を担う一方で、全国的に広がる医工連携事業に捉えユニークな新型の医療機器を様々提供している。特に看護領域・整形外科ペインクリニック領域、医療安全・感染対策・医療教育領域などに対して展開中。

主要製品

整形外科関連	看護・医療安全領域	看護・感染対策領域	薬剤・医療安全領域	ペインクリニック領域
				
ショルダーハーネス 【実用新案】 肩腱板断裂手術後の患者様がより安全・安心してシャワー浴ができる。	点滴キャップ 【実用新案】 カーテンにひっかかる点滴スタンドにこれを！医療安全対策に有効です。	尿バッグフック 点滴スタンドにワンタッチで取り付け、取り外し可。秀逸なデザインが現場の課題を解決しています。	ケモ・HDバッグエコ 【意匠登録済み】 輸液バッグに触れることなく点滴を。払い出し～投与～廃棄まで安全・安心を届ける。	薬液容器ホルダー 容器に触れずにひとりで安定充填。充填作業がスピードアップ。最適な位置高さ角度で容器ゴム栓にアクセス。

保有特許等

- ・ブランジャーアシストリング特許権・意匠権

採血検査用 やわらか湯たんぽ

RACOON Medical 三田理化メディカル株式会社

指先の血行促進、採血前の気持ちになごみ



開発背景

三田理化メディカルは、医療機関や医薬品会社のクリーンシステム領域を手がける三田理化工業(大阪市)の事業開発部を引き継ぎ2014年9月に創業。海外への展開を推進する傍ら、医工連携による新たな事業開発に取り組んできました。
今回、同社が手がけたのは、採血前に患者の血行を促進するための「採血検査用 やわらか湯たんぽ」

採血検査用 やわらか湯たんぽ

- やわらか湯たんぽはウェットスーツの素材を使用しているため、濡れても乾きがよく、手洗いも可能です。電子レンジなどで加熱して使う保温用のホットバックで報告されるような火傷の心配も減らせます。
- 安心
 - 低温やけどしにくい素材と構造
 - 癒されるデザインと色で採血時の抵抗感を低減
 - 柔らかくて落としても壊れにくい
- 簡便
 - 手洗い可能なウェットスーツ素材
 - お湯を注ぐロートもキャップも大きめでネジも締めやすく扱いやすい
- 省エネ
 - 準備は70℃～80℃のお湯だけで電源不要
 - 温度の持続は3～4時間

医療現場の困りごとを解決する技術を探求

三田理化メディカルの展示会の出展ブースは所狭しと製品が並びます。「“隙間”をとらえたような商品ばかりですが、現場の医療従事者が抱えるリアルな課題をしっかりと解決するモノばかりです」と小さな商品にも懸命に取り組む一風変わった経営者と言われることもあれば、「医療現場をよく知ってる人」と評されることもあります。
そんな千種さんは診療科にこだわらず、医療現場の困りごと発表会があれば足を運び、1つでも多くの現場、1人でも多くの医療者と接し、自身の頭の中で困っている状況を思い描けるまで熱心に会話をする



展示ブース

で、癒されるデザインと低温やけどの心配が少ないのが特長です。過去に製品化した手袋型に加え、2つ目のモデルとして筒型を共同開発しました。埼玉医科大学病院の臨床検査部から挙げられた「採血帯*の締め付け具合を調節できないか。加温機能や保温機能も欲しい」という声がかきつけです。
すでに他の医療機関が抱えていた「採血時に手先を温めたいが、低温やけどは防ぎたい」という課題に対して手袋型を土台に、新製品の構想は始まりました。「臨床検査部からの採血をスムーズにしたいというニーズも、医療機関が変わると求めるものが異なります」と同社代表取締役の千種潤也さんは話します。手先を温めるといふ提案に対して、病院は腕部を温めたいというものでした。
例えば、冬の寒い中、朝8時から高齢者が列を作って採血を待つような医療機関では、いざ採血をしようにも冷えた腕に血管が見えないとか、血流がよくないなどの理由で採血が困難になることがあります。これに対し、医療現場ではそれぞれの経験則に

基づいた「温める」行為で解決しているのです。「その経験則の違いは、実際に現場で話を聞いて初めてわかること」と千種さん。「腕部を圧迫させずに温める」というニーズに対して、その機能があることで結果として何を求めているのかを突き詰め、折衷案として「筒型のやわらか湯たんぽ」に解を見出しました。
今後の展開として、医療機関の臨床検査部のほか、献血センターなどへの提案を検討しています。



筒型の試作から完成形まで



手袋型の試作から完成形まで



キャップを外してロートをつけた様子

やわらか湯たんぽ着用の様子



筒型のやわらか湯たんぽを使用する様子



手袋型のやわらか湯たんぽを使用する様子

人物としても知られます。こうした姿勢はものづくり企業に対しても変わりません。昨今、医療・福祉産業に参入する機会として全国的に医工連携が広がる一方で、ものづくり企業の多くが「医療者が必要としていたから作ったけど売れない」という悩みを抱えています。これに対して、「大事なのは困りごとを抱える課題に対して、この製品はきちんと応えられるのかです」と、少しずつでも売れる市場をものづくり企業と二人三脚で開拓するのも、千種さんが自身の足で稼いだきたノウハウです。
医療現場の困りごとともものづくり技術が鍵と鍵穴のようにカチッと合えば市場は開く。「値段がつき、購入してもらった時に初めて商品になったと言える。売れた時には感動します」と、医工連携への思いを語る千種さんです。